第09章 — 人間が下した最後の命令

01 — 六年という数字

大臣は儀礼館の石床で死にかけていた。救急隊員の一人が頭の傷口を圧迫し、もう一人が携帯式の機器で心拍を監視している。壊れた手すりと投げ出された刀のそばで、その小さな電子音だけが場違いなほど静かに響いていた。

ロイは自白を要求することもできた。だが彼が最初に尋ねたのは、ハヴェルに話をさせても傷が悪化しないか、ということだった。隊員は、数語なら可能だが、身動きとショックで残された時間がさらに短くなるかもしれないと言った。ロイは脇へ退き、男の視界にレイチェルと裁判所の立会人が入るようにした。

「なぜ、六年なの？」レイチェルがもう一度尋ねる。

ハヴェルは目を開いた。「使うには十分な長さだった」と彼は言った。「そして、未来を期待する者がいないほど短かった」

謝罪でも、十分な説明でもない。相手をつかみ上げ、すべてを言わせ、死にゆく身体から最後の答えを力ずくで引き出す――古い衝動がロイの中にせり上がった。彼は両手を脇に下ろしたままにした。

「資料には修復制限機構が記されています」とレイチェル。「あなたは承認している。この制限は医学上の理由だったのですか？」

「違う」

立会人は質問と回答を独立記録器へ繰り返した。隊員が再びハヴェルを調べる。続けてもよいと、隊員は小さくうなずいた。

「百年生きられるとは約束できなかった」とハヴェルは囁いた。「だが、どうすれば可能になるか、その輪郭が見え始めていた」

02 — 人間の恐怖

「百年生きる人工の人々だ」とハヴェル。「強く、修復でき、我々が自分たちの価値だと思ってきた仕事を何でもこなせる。我々は、寿命の制限が種を守るのだと言い聞かせた」

「誰の種を？」とロイ。

「人類だ」

「俺が所有物でいることを拒んだから、あんたは五人の追跡者を送り込んだ。それが人類を守ることだったのか？」

ハヴェルはほんの少し頭を動かした。「そう信じていた。お前を所有する権利があると思ったのは間違いだった。だが、お前たちが何になっていくかを恐れたことまで、間違いだったかは分からなかった」

レイチェルは署名入りの命令書に目を落とした。六年の周期を人口管理上の制約として承認し、その制約を身体に埋め込まれる本人には異議申立ての権利さえ与えていない。国家は、一つの政治的予測を強制するために、生物学的な限界を人工的に作り出したのだ。

「人間が不要になるのを恐れたのね」

「そうだ」ハヴェルの声はほとんど消えかけていた。「人が弱いからではない。愛も、労働も、芸術も、記憶さえも、より長い時間を持つ者のほうがうまく果たしてしまうのではないかと恐れた。我々はそれを、生存への脅威と呼んだ」

ロイは、傷だらけの老人の手を見た。大臣は自分だけのものだと信じる技を生涯磨き、その技を理由にほかの者から時間を奪ってきた。

「あんたは間違っていた」

「そうかもしれん。だが私は、世界に自分の恐怖を守らせた」

03 — 仕組み

ハヴェルの指が倒れた刀へ伸びた。雷神がその手をそっと刀から遠ざける。大臣は何もない空間を見つめ、もう一度言葉をつなごうとした。

「発勁。力を発することだ」と囁く。「奇跡ではない。少なくとも、我々が測定できた部分は違う。神経が一つの瞬間に同意する。身体が、受け取れる瞬間に必要なものを受け取る」

レイチェルが近づいた。「それと、修復格子の関係は？」

「昔の研究班は、もっと多くの電力を与えようとした。電力を増せば、廃熱も、無駄も、熱も増える。そこで武術家の神経パルスを観測した。身体をもっと激しく燃やす必要はなかった。修復システムに、いつ働くべきかを聞き取らせればよかった」

「人間の神経信号のタイミングを基準にしたの？」

大臣は一度だけうなずいた。「試作機は、そのパターンを模倣した。エネルギー源は別だ。ヘリウム3。モデル上は小型核融合だった。動力装置は患者に使えるほど安全にはならなかった。可能性があったのは制御装置のほうだ」

救急隊員は、もう話さないよう告げた。ハヴェルは目だけをわずかに動かして拒んだ。

「百年というのは？」とロイ。

「予測上の範囲だ。治療法ではない。まだな。技術者たちがその先を示すより前に、法律家たちが六年で切り捨てた」

呼吸が浅くなる。さっきまで刀を通じて未知の力を放っていた身体も、今はごく普通の酸素を必要とし、それすら十分に取り込めなくなっていた。

04 — 刀が残した最後の謎

「刀だ」とロイは言った。「刃先から何が出ていた？」

ハヴェルは楽しげでもない笑みを浮かべた。「お前は見ただろう」

「圧力は見た。刀身が触れていないのも見た。何が力を伝えたのかは分からない」

「私を鍛えた男たちにも分からなかった。彼らは効く技を教え、その説明はまだ生まれていない者に委ねた」

「天文台と関係があったのか？」

「知らん。計器の示す時刻が一致しなかったので、あそこの時計を借りた。パルスを同期させると、古い機械が説明できない空白を記録した。試験を止めろと言われた。私は署名した」

刀の衝撃が新しい物理法則に由来する証拠として、ロイはその証言を扱わなかった。大臣の記憶は完全ではなく、身体も衰弱している。独立したセンサーの記録は、その死後も長く検証されるだろう。

「研究を公開することもできたはずよ」とレイチェル。

「そうすれば、なぜその成果を禁じたのか、世界に説明しなければならなくなる」

ハヴェルはしばらく梁の向こうを見つめた。若い役人だったころ、この建物から見た澄んだ空を探しているようだった。

「私の刀が秘密だったのではない」と彼は言った。「誰にも問いを立てさせなかったことが、秘密だったのだ」

05 — 最後の署名

裁判所の立会人が執行命令書の原本を掲げた。そこにはすでにハヴェルの署名がある。それが真正なものと認めるか、そして先ほど述べた理由を公的記録に残してよいか、立会人は尋ねた。

「よい」

さらに一つ、明確にする必要があった。「六年の規則は、立証された生物学的限界に基づいていたのですか？」

「違う」

「より長命な人工の人々の開発と普及を阻止するために、課した制約だったのですか？」

「そうだ」

独立記録器が二つの回答を収める。雷神と風神もそれぞれ証言を追加した。救急隊員は、この時点でハヴェルには意識があったが、容体は危篤だったと記録する。証言の証拠価値をどう評価するかは、今後、弁護人と裁判所が判断しなければならない。死に際の言葉だけで独立した検証を省くことはできない。

「彼らはどうなる？」とハヴェル。六年の制限を身体に抱える人々のことだった。

「本人たちに尋ねます」とレイチェル。「治療を提供し、研究に加わるかどうかも自分で選んでもらいます」

「もし百年生きたら？」

ロイは傍らにしゃがみ、大臣に聞こえる距離まで顔を近づけた。

「ならば百年かけて、生きるということについてあんたが間違っていたと示せるだろう」

06 — 勝利のない死

救急車が館に到着する前に、ハヴェルの最後の息が途切れた。医療班は蘇生を試み、担当医がこれ以上の処置では回復が見込めないと判断するまで続けた。立会人が時刻を記録する。雷神は両手を身体の脇で開いたまま立っていた。手を開いたからといって、長年の忠誠をなかったことにはできなかった。

ロイに勝利の感覚はなかった。降伏しない武装した相手を制したが、戦いを終わらせた一撃は人間の命も終わらせた。大臣は暴力を選び、ロイは可能なかぎり抑制を選んだ。どちらの事実も、その死を清らかなものにはしない。

レイチェルがロイの袖に触れる。「法廷へ連れていこうとしたでしょう」

「裁判所の判断を、生きて聞くべきだった」

「それを不可能にしたのは彼よ」

「分かっている」

医療班は、名前のない患者にもそうするであろう慎重さで遺体を運んだ。新たな憲章は、権力を残酷に使ったという理由で人の尊厳を取り上げない。ロイは、証拠枠の中に封印された折れた儀礼刀のそばを担架が通るのを見送った。

一人の人間が、ロイには理解できない力を使っていた。そしてその人間は、誰が未来を持つことを許されるかまで決めていた。最初の謎は残った。二つ目には、署名された答えが残された。

07 — 三つの独立記録

翌朝までに評議会は、ハヴェルの供述、壁の引き出しから得た資料、連続性施設の医療記録を別々の管理下へ置いた。一つの録音だけを決定的証拠とはみなさない。署名入りの六年制限命令、封印された基礎試験、本人の直接証言は同じ結論を指していたが、それぞれ異なる方法で確認しなければならなかった。

イマニはセナの細胞にある分子レベルの制限機構を、残された設計図と比較した。一致は、管理された研究を申請する根拠にはなる。しかし治療法を確立したと宣言する根拠にはならない。レイチェルが調べたヘリウム3構想には、最も大胆な前提が、元の技術者自身によって「未検証」と明記されていた。

ヌルは大臣の最後の刀撃について音響記録を分析した。独立した複数のセンサーで再現性のある圧力波形を確認できたが、力が刀身の外へどう伝わったのかは説明できない。報告書を整えるために答えを捏造することは拒んだ。

エイドリアンは天文台の記録から別の事実を見つけた。証人エンジンに現れた説明不能な間隔は、百年計画で用いられた時間基準にも記録されている。ただし、装置そのものは同一ではない。誰かが一つの基準を別の場所へ運んだのだ。その基準とともに異常も移ったのか、答えは出なかった。

調査団には、かつてないほど多くの証拠があった。同時に、すべてを理解したふりをする余地は、かつてないほど少なくなっていた。

08 — 雷神が守ったもの

葬儀の後、雷神は古い道場へ戻った。風神は、かつて大臣が稽古していた空間の前に立つ彼を見つける。二人は長いあいだ、師から受け継いだ技が、その師の目的に永遠に仕える義務を生むと信じていた。

「寂しいか？」と風神。

「ああ」

「許すのか？」

「いや」

ロイは静かに入ってきた。二人に許しを求めに来たのではない。道場の古い記録を返しに来たのだ。雷神は頭を下げ、顔を上げないまま話した。

「先生から教わった一番強いものを、あんたに見せたと思っていた。だが見せたのは、人を傷つける部分だけだった」

「残りは何だ？」とロイ。

「力を発してはいけない瞬間を知ることだ」

ロイは考えた。大臣は人間の身体について並外れた知識を持ちながら、恐怖のためにその用途を武器と制限へ閉じ込めた。

「なら、その続きを教えろ」とロイ。「ただし、習うかどうかは本人に決めさせろ」

道場の外では朝の給水所が開いた。列はいつもどおりゆっくり進む。そこに並ぶ資格は、誰かが決めた寿命の期限には左右されなかった。